

言葉の拡張と言語獲得の基盤

身体感覚経験・比喩的拡張・イメージスキーマ

矢沢国光

はじめに

9月21日、「安部首相」が誕生し、それを受けて、中国政府が、次のようなコメントを出しました。

「**聽其言、觀其行** ting qi yan, guan qi xing」[その言を聴き、その行を観る。]

小泉政権の間、日中首脳会談が5年間途絶えました。中国政府が、「聽其言、觀其行」と述べたのは、安部新首相が、靖国参拝をするのかどうか、見極めたい、ということでしょう。安部首相は、国会での野党の追及に対して、「靖国参拝」については、明言を避けたものの、先の大戦の「植民地支配と侵略」を謝罪した村山首相談話を受け継ぐと表明し、従軍慰安婦問題で旧日本軍の関与を認めた河野官房長官談話も、すんなり認めました。10月7日の安部訪中の実現は、中国政府が、安部首相の国会での「言を聴」いて、「靖国参拝はない」と判断したものと考えられます。しかし、まだ「觀其行」が残っています。中国は、引き続き、安部首相の言動を厳しく「其の行を観る」という姿勢です。

ここで、言語学的に注目したいのは、「聴」とか「観」とかいう言葉が、たんに「耳で聞く」「目で見る」という感覚器官のはたらきを表すだけではなく、「聴いたことを判断する」「観たことを判断する」という頭のはたらきまで表すのに、——意味を拡張して——、使われていることです【註】。

このように「言葉の意味・使い方が広がる」ことが、なぜ可能なのか。それが今回のテーマです。

【註】中国語辞典によると、中国語の「観（みる）」は、「上山觀風景（山に上がって風景を見る）」のように「目でものを見る」のほかに、「世界觀」のように、「認識する」という 使い方もある。

1 言葉の拡張とその普遍性

(1) 「見る」の拡張使用

「見る」という動詞が、「目で（目の前にある）ものを見る」という意味から拡張して、「目で見るように頭で捉える」という意味で使われるのは、日本語や中国語ではありません。

英語でも、I saw a big Christmas tree at the plaza.（広場で大きいクリスマスツリーを見たよ）は、「目でとらえる」という意味ですが、I can't see the point.（要点がわかりません）は、「目で見るように頭でとらえる」という意味になります。『Eゲイト英和辞典』では、see の意味を次のように書いてあります【註】：

see I 目でとらえる

見える、見る *上の例参照

図 コピー

傍觀する I can't stand to see her blaming herself any more.（これ以上彼女が自分自身を責めるのを見てはいられない）

見物する Did you see the soccer game last night?（昨

晩のサッカーの試合を見たかい?)

経験する see the life (人生経験を積む)

II 目でとらえるように頭でとらえる

理解する、わかる *上の例参照

想像する I see him as an able man. (彼のことを有能な人だと思う)

【註】田中茂範ほか著「Eゲイト英和辞典」(ベネッセコーポレーション、2003)は、単語の中核的意味を「コア」として示し、百余の単語については、コアのイメージをイラストで表示してある。多義語のさまざまな語義への展開をコアのイメージから理解出来るように、という意図による。なお、この「コア」による英語学習のNHKテレビ英語講座(講師・田中茂範氏ほか)が、2006年4月～9月放送され、10月から再放送されている。認知言語学入門のための、お薦めの番組である。

聴覚障害者の方は気づかないかもしれませんが、TBSラジオの自社宣伝のコマーシャルに、「**きけばみえてくる**」というのがあります。「聞く」ことがなぜ「見る」ことになるのか。この「見えてくる」は、「TBSラジオを毎日聞いていれば、世の中のいろいろなことが分かりますよ」ということでしょう。ここでも「見える」(目でとらえる)は「分かる」(頭でとらえる)に、意味的に拡張使用されています。

日本語の「見る」には、さまざまな拡張用法があります：

「新聞を見る」(読む)

「このひどい雨足から見て、明日の運動会は、中止だろう」(判断する)

「弟の面倒をみる」(世話をする)

「味をみる」(確かめる)

「大臣が被災地を見る」(注意してよく調べる)

「バカを見る」(経験する)

「お医者さんにみてもらおう」(病気や怪我の具合を調べる)

(下村式小学校国語学習辞典、偕成社)

では、手話については、どうでしょうか。上に辞典から書き写した「見る」の意味では、日本の「見る」の手話は、使われないようです。全日本ろうあ連盟『日本語手話大辞典』には、「見る」の手話が3種類載っています。

見る① [目の下から人差し指を前に出す]

見る② [目の位置から右手の2指の指先を前に出す]

見る③ [右人差し指を目元から前にくり返し出す]

ここで、「映画を見る」は、見る①または見る②、「様子を見る」は、見る①、「遠くを見る」「見られると恥ずかしい」「向こうまで見通す」は、見る②、「食べてみる」は見る③となっています。以上は、日本語の用法と同じです。

日本語では「見る」と表すが、手話では、見る①②③のいずれでもないものがあります：

「面倒を見る」の手話は、〈世話をする〉

「大目に見る」の手話は、〈そのまま〉〈かまわない〉

「バカを見る」の手話は〈損〉

日本手話においては、〈見る〉①②の手話は「目でとらえる」という意味に使い、「頭でとらえる」（判断する、確かめる、よく調べる）や「経験する」など、拡張された意味では、使われないようです。では、どんな手話で表すのか。判断する、確かめる、よく調べる、経験する、などの意味を表すときには、それぞれの意味を表す別の手話を使う、となっています【註】。

ただ、手のひらで目を隠して、「見えない」→「わからない」という手話の使い方があります。また、「(人)を見る眼がある」を、〈目〉〈高い〉で表すのは、「目」によって評価する能力、つまり頭のはたらきを表しており、「見る」→「評価する」という意味の拡張です。手話の場合も、

目でとらえる→目で見ると同時に頭でとらえる
という意味拡張が、あることがわかります。

【註】言葉の拡張使用における、音声語と手話の相違は、他の語についても、しばしば見られる。その原因として、例えば〈見る〉の手話の形が、目から出る視線を表すものであり、「写像性」が強いため、「目でとらえる」という意味から離れることが困難になっている、とも考えられる。

(2) 基本語彙の拡張使用

人は新しい事物を古い言葉で表すしかない、ということ、前回述べました。パソコンの入力装置という新生事物を表すのに、「マウス」という古い言葉が転用されています。マウスはマウス（ネズミ）に形が似ているから、記憶しやすい。しかし、パソコンのマニュアルに「マウス」の説明が載っていることからわかるように、「だれでも自然にわかる」用法ではありません。「マウスとは…ですよ」と、「教える」必要があるのです。

これに対して、とくに使い方を教えたり、意味を説明したりしなくても、元の意味（単語の意味の「コア＝核」）がわかれば、聞いて自然にわかる拡張使用があります。というより、言葉の拡張使用は、元もと、「教えなくても自ずと意味がわかる」から可能だというべきでしょう。教えなければ、あるいは、説明しなければわからないような、拡張使用は、言葉としては、むしろ特殊な部類でしょう。

いくつか、例を挙げてみます。

「気持ち」という目に見えないものを表すために、人は目に見える事物の表現を転用します。しかし、どんな言葉でも、すぐに伝わるというわけではありません。

「気持ちがブルーだ」は、ブルーだから青空のように爽快な気持ちかと思ったら、逆でした。どうやら、落ち込んでいる状態らしい。インターネットで調べたら、「マリッジブルー、結婚前に突如不安に襲われ、憂鬱な状態になること」とありました。これは、学習しなければ、わからない言葉です。

これに対して

「気持ちが高まる／沈む」「気が大きい／小さい」「気が長い／短い」は、説明なしに、（文脈・場面を手がかりとして）、意味が取れます。

人の行動・性格を表す言葉では、「海千山千」（海に千年山に千年住んだ→長年経験を積んで老かいらになっている者）、「へそ曲がり」「そろばん高い」などという慣用句は、学習しないとわかりませんが、「彼は、かたい／やわらかい」「がさがさした男だ」「あの男は、まっすぐだ／ひねくれている」「彼は丸くなった」「太い／ほそい」「明るい／暗い」「開放的／閉鎖的」「あっさりしている」「淡泊な気性」「ドライ」などは、初めて聞いても、説明なしに、意味が想像できます。

「真っ直ぐ」「曲がった」を英語、中国語、手話について調べてみると、表のようになりました。

	真っ直ぐ	曲がった
日本語	あの人は <u>真っ直ぐ</u> な人だ。	あの人の心は <u>曲がっている</u> [ねじれている]。
英語	straightforward (真っ直ぐな⇒正直な) upright (真っ直ぐに立った⇒正直な)	bent (曲がった⇒不正直な) crooked (曲がった⇒ひねくれた) twisted (身をよじる⇒ひねくれた)
中国語	直 zhi (一直線⇒正しい) 笔直 bizhi 的人 (真っ直ぐな人)	曲 qu (曲がっている⇒道理に合わない) 弯曲 wanzu 了的性格的人 (曲がった性格の人)
手話	まじめ・正直な人【図1】【図2】	(図1で右手をジグザグに上に動かす) 不まじめ・不正直な人

日本語でも、英語でも、中国語でも、そして手話でも、人の性格を表す言葉として、

真っ直ぐ⇒まじめ・正直・正義感のある

曲がっている⇒不真面目・不正直・不正義

のように、「真っ直ぐ」「曲がった」という言葉が、ほぼ同じ意味合いで使われています。これは、偶然とは、考えられません。

図1 コピー

図2 コピー

「あな(穴)」の意味のコアは、「くぼんだところ」です。そのくぼみが向こう側まで突き抜けている状態も、「くぼんだところ」の延長として、穴のコアに含めてよいでしょう。鼻の穴、洞穴、落とし穴、シャベルで地面に穴を掘る、ドリルで板に穴を開ける、などが「穴」のコアの意味としての用例です。

これに対して、「急に講師の〇〇さんが来られなくなって、プログラムに穴があいてしまった」と言われたらどうでしょうか。講師が来られなくなった。予定したプログラムがそのままでは、実施できない。困った！という状況が出現したことがわかります。こうした文脈と「穴」のイメージを結びつけるならば、「プログラムに穴があいた」とは、「プログラムに、補わねばならない欠陥が生じた」ことだと理解するでしょう。

「店員が売上金の一部を使い込んだため、帳簿に穴があいた」(金銭の不足)、「休んだ講師の穴埋めをした」も同様です。

では、なぜ、こうした「穴」ということばの拡張使用で、意味が伝わるのでしょうか。

2 言葉の拡張の普遍性の根拠—生物種としての人の身体・感覚

人には、円や平らな面の一部が欠けている形を「不完全、欠陥あり」ととらえ、完全な円や平らで欠けていない形を「完全、順調」ととらえる心性が、共通してあるのではないのでしょうか。

中学の歴史の授業で、平安時代の関白太政大臣・藤原道長が「この世をばわが世とぞ思ふ 望月の欠けたることもなしと思へば」と詠んだと教えられます。望月、つまり満月によって「欠陥がない」ことを表すという言葉遣いによって、道長の気持ちや、スムーズに伝わります。平安時代の人にとっても、「穴」は欠陥であり、「穴がない」のは、満足すべき状態だったのです【註】。

【註】「釣りの穴場」「安くてうまくてそれでいて込んでいない穴場」(人に知られていないよい場所)という言い方もあり、ここでは「穴」は、逆により意味で使われています。

では、英語でも「穴」が「不完全」「欠陥」「金銭の不足」に転用されるのでしょうか。辞典には、
a hole in the road（道路にあいた穴）、
She found herself in a hole.（彼女は窮地に立った）、
Their proposal is full of holes.（彼らの提案は矛盾だらけだ）
という例が載っています。

日本語でも英語でも「穴」の「くぼんだところ」というコア的な意味が、「不完全」「欠陥」という意味に転用されるというのは、歴史や文化を超えた、人類共通の何かに根拠があると考えるのが自然です。【註】

【註】手話ではどうか。『日本語手話辞典』によると、〈穴〉の手話（左手の4指と親指で丸を作り、右人差し指を中に入れて回す）は、「壁の穴をふさぐ」のように、物理的な穴を表すときの用例のみ載っている。「欠陥」は〈手落ち〉の手話で表し、「不足」は、〈不足〉（左手のひらを右人差し指でほじるようにする）や〈貧しい〉（右手親指をあごに当て、前に出す）の手話で表すことが多いようだ。「〈手落ち〉は、本来あるべきものが抜け落ちているさま」とあるが、日本語の「手落ち」の影響はないだろうか。むしろ〈不足〉の手話が「穴」の体験に近いのかもしれない。

人類にとって、歴史や種族、文化を超えて共通するものといえば、生物種としての「ヒト」であるということです。生物種としてのヒトが現代人に連なる人となる過程（人類の発達の過程）で、言葉を使用するようになりますが、こうした人類の発達過程は、人（の集団）が外界に対して働きかけ、それを自己の内部に取り込み、自己を発展させていく営みの繰り返しであるとみることができます。

そのような、生物種としての人の、外界に対する働きかけ——それに伴う外界の認知・理解——という「原体験」は、時間空間を超えて、だれにでも共有される経験です。そして、そのような「原体験」に結びつく言葉こそ、学習なしに拡張使用されることばなのです。

「言葉は、われわれが日常世界に身を置き、環境と相互作用しながら、**身体的な経験**を基礎として獲得してきた伝達の手段である。言葉には、日常世界の中で、環境と共振しながら、世界を意味づけていく人間の身体性に関わる要因がさまざまな形で反映している。ここで問題にする**身体性に関わる要因**としては、**五感、空間認知、運動感覚、視点の投影、イメージ形成、カテゴリー化**、などの要因が含まれる。生物としての人間、環境の中に埋め込まれた存在としての人間が、長い進化の過程を経て獲得するにいたった言語能力の根底には、身体性に関わる要因が密接に関わっている」（山梨正明、言語科学の身体論的展開—認知言語学のパラダイム、『ことばの認知科学事典、』大修館書店、2001）

このような「身体的な経験」にはどのようなものがあるのでしょうか。次は、ある認知言語学者の作ったリストです。（山梨正明、**認知言語学原理**、120 p、2000 くろしお出版）。

図 コピー

これらの一つ一つについて、子どもはどのように身体的な経験や認知を獲得していくのか、それが日本語・手話にどのように使われているのか、明らかにしていく必要があります。ここでは、一つの例として、「遠い・近い」を取り上げましょう。

「遠い／近い」のコアになる意味は、「わたしの家から海までは遠い／近い」のように、「(空間的に)距離が長い／短い」ことです。そこから「遠い昔」「近い将来」のように、時間的な隔たりに、拡張使用されます。さらに「遠い／近い親戚」のように血縁関係の程度を表したり、「お近づきになる」「疎遠になる」「遠ざけられる」のように、人間関係を表すことにも使われます。「当たらずといえども遠からず」「考え方が近い」のように、認識の評価にも使われます。

英語の near (近い) も、The drug store is near to our house. (薬局は、家から近い) がコアの意味ですが、in the near future (近い将来) のように時間的にも使い、near relatives (近い親戚) にも使われます。far (遠い) も、in the far past (遠い過去に) のように時間的にも使い、I wasn't far wrong. (私の判断は、ひどく間違っていたわけではない) のように、認識の評価にも使われます。

『日本語手話辞典』では「秀才というには遠い」→〈賢い〉〈まだまだ〉(左手のひらに右手指先を向けて左右に離し、右手を上下に振る) となっています。手話の〈まだまだ〉は、よく冗談に、左右の手の間隔を大きめに長くして、「結婚はまだず一っと先です」とやりますが、これは、空間的な距離で実現までの時間的な長さを表していることとなります。

このように、日本語でも英語でも手話でも(おそらくほとんどの言語で)「遠い／近い」は、空間的な距離→時間的間隔、関係、考え方等についての評価規定に拡張使用されています。

このことは、「遠い／近い」という体験・認知が、人にとって、普遍的な、共通の、体験・認知であることを示しているのではないのでしょうか。

では、日本の子どもたちは、どのようにして、この「遠い／近い」という体験・認知を経験しているのでしょうか。ハイハイする1歳未満の子どもにも「遠い／近い」の感覚はあるのでしょうか。ママの近くに行く／ママから離れる⇒ママとの心理的な一体感／距離感⇒他の事物との関係の強弱の認識、ということもあるかもしれません。散歩やかけっこをする中で「遠い／近い」という認識は持てるのでしょうか。遠ざかる電車／近づく電車を見るとき、「遠い／近い」の認知がそこにあるのでしょうか。「遠い／近い」が空間的距離の表現から時間や他の分野についての表現に拡張使用されるのは、いつ頃どんな経験を経てなののでしょうか。

残念ながら、認知言語学者の研究も、まだこうした領域にまでは、ほとんど手が届いていないようです。日常的に乳幼児・幼児と関わっているろう学校や早期支援の教員たちにこそ、子どもたちの身体活動経験——それに伴うまわりの大人たちとのコミュニケーション——を観察し、言語発達の基盤の形成についての知見を蓄積して欲しいと思います。【以下、次号】